



—湾岸・アラビア半島地域ニュース—

確認されたオサマ・ビン・ラーデンの死

アルカーイダは、5月6日、オサマ・ビン・ラーデンが死去したことを確認する声明をウェブサイトに掲載した。同日、アフガニスタンのターリバンも、ビン・ラーデンの死去について声明を出した。米国は、遺体は水葬にしたとし、死体の写真も発表しない方針だが、米国、アルカーイダ、ターリバンがオサマ・ビン・ラーデンの死去を確認したことになる。5月8日、オサマ・ビン・ラーデンが最後に作成したとされる音声声明が、ウェブに掲載されたと報道されているが、中東調査会はまだ確認していない。

5月2日の襲撃作戦について、当初、米国側の発表に混乱があったが、概況が明らかになりつつある。オバマ大統領が参加する襲撃に関する会議は、3月14日から4月28日まで計5回開催された。オバマ大統領は、4月29日朝に作戦実行を指示した。5月2日未明の襲撃では、ビン・ラーデン側からの発砲は、襲撃の当初だけだったようだ。襲撃で死亡したのは、オサマ・ビン・ラーデン、息子1人、女性1人、警備の側近2名の模様。残された家族はパキスタン当局が身柄を確保している。米国のCIAは、押収したパソコンなどの解析を開始している。

襲撃作戦は、パキスタン側に事前に通報されなかった。オバマ大統領は、作戦終了後もヘリが無事パキスタン領空を出るまで緊張していたと報道されている。事後通告を受けたパキスタン側は、オサマ・ビン・ラーデンが国内いたことに気づかず、かつ米軍の作戦を探知できなかったなど面目丸つぶれになっている。さらに、ビン・ラーデンの国内滞在を知らないわけではない、あるいは潜伏を支援した勢力がいたはずだなどの追加の疑問にも直面している。ただ今回の作戦についてのパキスタンのかかわりでは、まだ灰色部分が残っている印象も残る。米国とパキスタンとの関係は「二重ゲーム」と表現され、割り切れない部分を残しながら、良好な関係が維持される。

オサマ・ビン・ラーデン死去について、アラブ世界では、市民が街頭に繰り出すなどの怒りの反応はほとんどなかった。カイロやロンドンで小規模の抗議デモがあった程度だった。オサマ・ビン・ラーデン死去で、もっとも顕著な反応を見せたのは、殺害報道を喜んだ米国市民の一部だけだった。

アルカーイダの動向を探るには、次に出る声明が注目される。またオサマ・ビン・ラーデンが遺言メッセージを作成していたのであれば、いずれ、公表されるだろう。

アルカーイダ総司令部が発表した声明（中東調査会が翻訳した声明の一部：オサマ・ビン・ラーデンは、ウサーマ・ビン・ラーディンで表記）

- * アブー・アブドゥラー・ウサーマ・ビン・ムハンマド・ビン・ラーディン師が殺された。
- * 米国はウサーマを殺すことができたが、米国は報道・傀儡、軍事兵器、情報機関を持ってして、ウサーマが身を捧げたものを死に至らせることができるだろうか？ウサーマ師は、彼の死によって滅亡するような組織を作らなかった。
- * ウサーマ・ビン・ラーディンは、20世紀の預言者ではなかった。彼は、この高貴なウンマのムスリムである。ウサーマを育てた信仰心・コーラン・ジハードの扉は、これまでも、これからも閉ざされない。
- * イスラームの光が一人の人間の死によって消えるというのなら、ムハンマドや、ウマル、ウスマーン、アリーの死を想起せよ。彼らの記憶は東西に満ちている。真実の光は彼らの死によっては消えないのである。
- * ここから、我々アルカーイダは、アッラーに対しウサーマ師が邁進したジハードに邁進すると誓約し、その助力を請う。
- * 同様に、我々はムジャーヒド、ウサーマ・ビン・ラーディン師の血が我々と全てのムスリムにとって重いものであり、米国とその傀儡、追従者を、彼らの国の内外で追跡する呪いとなることを確認する。イスラームの兵士は、「米国と米国で暮らす者は、パレスチナの我々が民が安全に暮らすまで安全でいられない」、というウサーマ師の誓いを称揚する。イスラームの兵士は、疲れることなく、ひるむことなく、絶望することなく、降伏することなく、訓練し、計画を立てる。
- * パキスタンのムスリム人民に対し、パキスタンでビン・ラーデン師が殺されたという汚名をそそぐよう呼びかける。強力で総合的な蜂起により、米国の食指を除去せよ。

（中東調査会主席研究員 中島 勇）